

英語のプレゼンテーション方略を応用した 基礎ゼミ授業の実践

—Show & Tell から PechaKucha 20×20 へ—

杉橋朝子

Student Perception Shift of EFL Presentation Strategies for First Year
Experience Class: From Show & Tell to PechaKucha

Tomoko Sugihashi

Abstract

This is an observational study on development of students' presentation skills in *kiso-zemi*, or First Year Experience class. There are many university students who find presentation or public speaking difficult even in their mother tongue, yet they face opportunities to make speeches such as in extracurricular activities and job hunting. None of the *kiso-zemi* teachers are specialists in the subject, but teachers' expert knowledge may be of use. In this study, the practice used for EFL was conducted and step-by-step exercises were introduced in AY 2012 for "Show & Tell", "Poster Presentation", and "PechaKucha 20×20 (this case 20×10 was used)", a slide presentation. These practical approaches and outcomes of students' evaluation of these activities are presented and discussed. Students' self reflection to assess their improvement is nearly all positive, something that may be attributed to peer learning; i.e. group (pair) discussions, group rehearsals and student's feedback sheets.

1. はじめに

ここ10年余りの間に大学生活への導入や学習のサポートとして、入学直後を含む一年次に様々なカリキュラムや教育プログラムが日本の大学に普及している。昭和女子大学内でも初年次教育一環の授業としては日本語日本文学科は基礎演習、国際学科と英語コミュニケーション学科（以下英コミ）は基礎ゼミ、歴史文化学科は歴史文化基礎、現代教養学科は現代教養入門、初等教育学科は教育学基礎演習、という名称で開講されている（以下「基礎ゼミ」という名称を使用する）。それぞれの2012年度前期のシラバスを確認すると、1) 情報収集の仕方、2) 情報を正しく理解し要約ができる、3) 分かりやすい表現と論旨で発信する（書く、スピーチ、プレゼンテーションをする）のスタディスキルの学修が共通している。

インターネットやTVからはTED (Technology Entertainment Design) Talksを始めとして欧米型のプレゼンテーションスタイルが流れ、日本語でも、今やアイコンタクトとスマイル、ある程度のジェスチャーは必須である。「突然のご指名で…」などと言い訳をしながら、前置きの長いスピーチをするのは過去のものになりつつあり、突然であろうとなかろうと、人前では堂々と話し余裕を見せるのが「クール」とされる時流になった。学生生活には、授業内はもとより各種サークル活動や学園祭のイベント、就職活動など口頭発表の機会は多くあるが、話し方が不明瞭だったり、メモを顔の前

に広げて読んでいたり、課題が見られることも少なくない。スピーチ、プレゼンについての2012年度筆者担当クラスの前期アンケートでは、1年生は、上手になりたいという希望はあるものの、「人前では緊張して頭が真っ白になってしまう」や「恥ずかしくて皆の顔を見られない」などの悩みが見られる。母語でスピーチやプレゼンに慣れておくことが留学を控えた英コミ学生には特に必要であるし、それにはやはり基礎ゼミで取り入れることが相応しいと考えられる。

2. 研究背景

2-1. 実践したプレゼン方略

EFL (English as a Foreign Language) では様々な Oral English の研究がなされており、その方略の一部を基礎ゼミの授業に取り入れることを試みた。以下の三つを実践した。

1) Show & Tell

2) ポスタープレゼンテーション

3) PechaKucha (PowerPoint) でスライドを作成したプレゼンテーション

以下にそれぞれの方略を説明する。

2-1-1. Show & Tell

名前が示す通り、自分が大切にしている物や写真などを持参し、簡単なスピーチをクラスの前で行う、というもので北米では幼稚園や小学校でも人前で話し、また話を聞き質問ができるスキルの練習(英語)に取り入れられている。日本の児童英語(『やさしい英語で自己紹介 This is Me!』mpi)や初級者用プレゼン英語の教科書(“Getting Ready for Speech” Language Solutions Inc.)でも口頭発表の練習に取り入れられている。英語のスキルとして良い方略であれば、母語にも通用するのではないかと思ひ、数年前から筆者の基礎ゼミの授業で取り入れている。「思い出の品のスピーチ」と学生が命名したクラスもあった。

2-1-2. ポスタープレゼンテーション

ポスタープレゼンテーションは英語教員の間では様々なバリエーション(トピック、ポスター、一度にプレゼンをする数、時間配分、質問のタイミング、評価の方法)で実践されているが(Bayne 2005, Tanner and Chapman 2012, 他)、1) 分かりやすいポスター作成(情報処理)に向けての工夫がある、2) 話し手が表現方法や話し方を改善しながらプレゼンを行うことができる、3) 話し手と聞き手の距離が近くコミュニケーションを楽しみながら行える、という利点がある。学生もポスター制作を楽しみ、また繰り返し話すことで学習効果を感じられ達成感があることから、人気の活動になっている。またポスター作成や発表練習中の協同学習には「情報量が増え、お互いのエラーチェックが働き、視点と問題解決方法の多様化(佐藤 1996, p. 141)」があり、利点が多い。難点は複数の発表が同時にあるため、教室が騒がしくなりがちなことだ。これについては、なるべく発表者間の距離が保てるよう大きめの教室を利用し、近隣教室への迷惑を避けたい。

2-1-3. PechaKucha を使用したプレゼンテーション

PechaKucha (以下PK) は2003年に東京在住のアメリカ人建築家 Astrid Klein と Mark Dytham

が建築会社でのプレゼンのために開発したもので (PechaKucha 20×20 ホームページより), PowerPoint のスライドが自動で進んでいくソフトである。最近では世界 600 都市で開催され, 「PK ナイト・イン・(場所名)」と称して各自がプレゼンをし合うお祭りに発展している。日本でも東日本大震災のボランティアや募金を募るために被害の状況を端的に知らせる方法として, 六本木などで開催されていた。「20×20」とは1枚20秒で自動に進むスライドが20枚あるプレゼン, ということである。これに自動で進まない固定の表紙(名前とタイトルなどを表示する)と最後のスライド(例えば, Thank you, などを表示する)を合わせ全22枚で構成される。PKを使用する利点は1)スライドが自動で進んでいくので発表者は練習を重ねることが必須となる, 2)明瞭で分かりやすいスライドを作る必要がある, 3)発表者は会場を自由に歩いたり両手を使用したりと豊かなボディランゲージが可能となる, 4)発表者にとってはゲーム的, 聞き手にとってはエンターテインメントな要素がある, 5)スライドの数が決まっているため, 発表者の準備段階での情報整理が必須である, 6)発表時間が一定なので時間配分がより正確で計画がしやすい点, である。関西外国語大学教授で“Presentation Zen”シリーズの著者である Reynolds は PK を「プレゼンに対する姿勢を変え, PowerPoint を使用しての独創的で画期的なプレゼンの方法(2008, 筆者訳 p.41)」と賞賛し, 会社や授業などで有効利用する例を挙げている。

2-2. 2011年度の実践と反省点

2011年度後期(10月から1月)に基礎ゼミ担当クラスで以下のスピーチやプレゼンを行った。

- 1) 本の Show & Tell (個人, 2分程度)
- 2) ポスタープレゼンテーション (個人, 5分)
- 3) PK 20×20 を使用したグループプレゼンテーション

学生は, 前期クラスの24名のうち10名がそのまま後期クラスへ持ち上がり(14名は他の留学クラスや転科で移った), 4名が再履修者などの新規参入の学生で計14名であった。朗々と話す学生が増えてくれるものと期待したが, 思ったような結果が出なかった。以下に反省を込め問題点を検証したい。

2-2-1. Show & Tell

自己紹介を兼ねて, 自分の好きな本を紹介するスピーチを取り入れた。当該クラスでは, iPod touch または携帯電話で録音することを試みた。録音を各自聞いて特徴を把握するため, 自分の話し方の長所と短所などを書く課題を出した。学生は個性あふれる本を紹介してくれたが, 学期始めのクラスのまとまりがないときに録音したせいか, 肝心の自己紹介に話す側にも聞く側にも緊張感が漂っていた。時間配分も2分「程度」と幅を持たせたため, 長さの統一感がなかった。

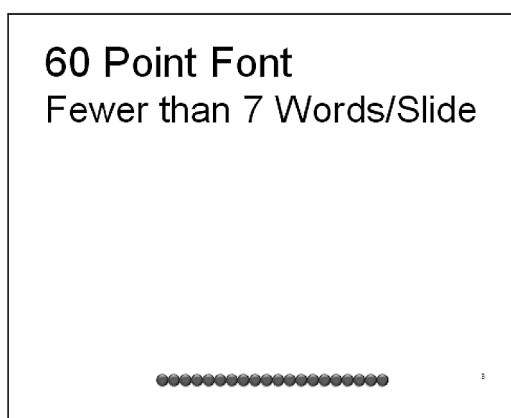
2-2-2. ポスタープレゼンテーション

当該のプレゼンではトピックを「ノートテイキング」, 「要約の仕方」, 「プレゼンの仕方」など, 基礎ゼミで扱うスタディスキルのリサーチとした。問題は情報の整理ができていないものが多かったことである。それはポスターからも一目瞭然で, 必要以上の情報を書き連ねたものや A4 サイズの用紙を何枚もセロハンテープで止めて大きくしたものがあつた。重要な情報の整理と把握ができていないために5分間で終わらないものばかりだった。サンプルのポスターを示して説明をしたが, 準備不足

のために、ポスターのサイズや字の大きさがばらばらだった。ポスターの作成やスピーチの練習を課題として学生に任せるのではなく、準備や練習も授業内で時間を与え、アクティビティを楽しむ余裕を作ることがプレゼンの効果を高めるために必要と感じた。

2-2-3. PK 20×20 を使用したグループプレゼンテーション

3人1組で課題図書（『世界の英語を歩く』本名信行著）の要約とそれに関わるリサーチをプレゼンすることとした。PKのシステムに、1秒ごとに消えていくタイマー（図1の丸い点）をつけたテンプレートを知り合いの教員から入手し、使用した。時間を視覚化することでプレゼンを効果的に行えると考えた。



出典: Christianson & Payne (2011)

図 1: 20×20 のスライドテンプレート（2 枚目から 21 枚目まで使用する）

学生は、わかり易いスライド作りはほぼできていたが、PKの長所を活かす話し方は達成できていなかった。20秒という制限に萎縮する学生が多く、消えていくタイマーの丸を見つめ続けたり、1枚のスライドあたりの発表が短か過ぎたり、アイコンタクトや姿勢、表情に反省を求めるプレゼンも少なくなかった。これは、学生の人前で話す経験不足とPowerPointを使用するプレゼンの練習不足が大きい原因と考えるが、見る側の学生にも緊張があり、プレゼン自体を楽しむ雰囲気がないことも影響していると思われた。ポスタープレゼン同様、準備、練習の時間を含めた授業作りが望ましく、またクラスに調和や信頼感（rapport）があってこそプレゼンのスキルが伸びると予想された。

3. 本研究

3-1. 研究目的

上記の反省点を踏まえ、2012年度の基礎ゼミ授業では年間を通して段階的に易しいプレゼンの方略から導入し、学生のプレゼンに対する意識の向上と上達を目的とし、効果を検証する。学生が自らプレゼンを楽しみ、パフォーマンスに慣れたと実感し、より高いレベルのプレゼンができることを求めたい。前期・後期で5回のスピーチ、プレゼンを行ったが、その授業の実践を紹介する。

また、「協同・協働学習」についてもその効果にふれる。ペア、グループ学習は英語教育では多く行われているが、近年「協同・協働学習」についての効果が日本語話者の授業の中でも注目されている（安永 2006, 鈴木 2009, など）。

3-2. 効果検証方法

以下の三つの方法で行う。

- 1) 評価シート
- 2) 観察
- 3) 振り返りアンケート

説明を以下に加える。

3-2-1. 評価シート

守末（2010）はスピーチ演習クラス（日本語）での学生同士のフィードバックシートに対し、「伸び高群」と「伸び低群」がどのように反応したかについて比較し、書かれたコメントに「更なる分析」をした被験者が「伸び高群」に最も高い割合を示したと報告している（p.62）。また、学生は親近感を持って安心するのではなく、仲間を「学習モデルとして認識し、そのパフォーマンスからいかに学べるかという視点を持つことが伸びにつながる（p.63）」と考察している。この調査を受け、学生に相互を評価させることはスキル向上に有意義であり、コメントに良かった点や改善点を自由表記し客観的に分析することが話す側にも聞く側にも効果があると予想した。また、学生に受け取ったコメントを考察する時間を与えることも効果的と思われた。

3-2-2. 観察

学生が表記するアンケートや評価シートだけでなく、担当教員の観察を加える。意識して書かれたものだけでない外からの視点を加えたい。準備段階でのグループ、ペアでの協同学習には、全員が取り組んでいるかどうか声かけを行い把握し、視覚資料の状態から情報整理ができているか、また準備の進み具合を調べた。更に、発表当日の学生の様子と発表内容についても報告する。

3-2-3. 振り返りアンケート

プレゼンの以下の項目について、4月と学年末のそれぞれの状態を5段階のリッカートスケール（全然できない（-2）、余りできない（-1）、どちらでもない（0）、少しできる（+1）、得意・かなりできる（+2））で示すよう無記名で学年末にアンケートを行い、伸びを調べた。

1. アイコンタクト
2. 声の調子・声の出し方
3. 姿勢
4. ジェスチャー・ボディランゲージ
5. スマイル・表情
6. 落ち着いた態度・恥ずかしさを我慢すること
7. 効果的な視覚資料（スライド、ポスター）の作成
8. テーマ選びと情報集め
9. 情報処理・時間配分・順序などの話の構成
10. 評価する力（良くないプレゼンの改善ポイントがわかる、良いプレゼンがなぜ良いか客観的にわかる）

また、以下の内容で自由表記を求めた。

- *最も上達したスキルについてとその理由。
- *余り上達が見られなかったスキルとその理由。
- *プレゼンの授業で全体を通して良かった点と改善した方が良い点

授業後に用紙を配付し、担当教員の課題収集ボックスに入れるよう指示した。

3-3. 対象学生

英語コミュニケーション学科1年の13名である。授業では前期は23名だったが後期にはこのうちの5名が1年留学クラス(FSP)に移籍し、18名になった。以下の発表1~3が23名、発表4と5が18名である。分析対象は1年間を通して伸びを調べるアンケート提出の13名となる。

3-4. 実践内容

前期15回の授業のうち、口頭発表を行ったのは以下の3回である。

- *発表1: Show & Tell (個人, 1分)
- *発表2: ポスタープレゼン (3人チーム, 6分)
- *発表3: ペアでのプレゼン (7分, PowerPointを使用)

後期は以下の2回を行った。

- *発表4: PK (10×10に変更したもの) を使用して個人でのプレゼン
- *発表5: PK (20×10を使用), 個人またはペアでのプレゼン

発表2以降からはコメント記入用紙を配付し、学生間でフィードバックを行った。また、フィードバックに対し考察するコメントシートも用意した。

4. 結 果

以下に各発表と学生の反応について述べる。

4-1. Show & Tell

自己紹介を兼ねて品物についてのスピーチを2回目の授業で行った。スピーチの期待を高めるため初回授業には学生の自己紹介を敢えて行わず、翌週に大切にしている物や写真などを持参するよう伝えた。発表に際し、注意したのは次の5点である。また、良い例と悪い例を実践して示した。

- 1) 時間は1分。家で55秒から65秒で終わるよう練習する。
- 2) メモを読みながらの発表は避け(母語で1分なら上手にできる、と励ました)、大きい声で口を大きく開けて話す。
- 3) クラスメートの顔を見てできるだけアイコンタクトをする。恥ずかしい場合は下を向かずに、教室後ろの壁を見るようにする。
- 4) 髪を触ったりかきあげたりせず、品物を持ってまっすぐ立つ。
- 5) 私はこのような人物ですが、皆さんと友人になりたいです、という気持ちを込めて笑顔で話す。

学生はバッグや携帯電話につけているマスコット、高校時代のクラブ活動の写真やユニフォーム、コンサートチケットなどを持参した。黙ったまま立ちつくすような学生は見られず、終始和やかな雰囲気が進んだ。目的が自己紹介なので、30~40秒程度の短いスピーチをした学生には、「もう少し説

明があるともっと良く分かったかもしれません」などとコメントしたが、やり直しは強要しなかった。好きなバンドや歌手に関わる品物を持参した学生には、授業後すぐに別の学生が近づいて、「今度一緒にコンサートに行きましょう」などと会話のきっかけ作りにもなっていたようである。

学期末のアンケートによると、8割の学生は1分という長さは的確と感じていた。自由表記で書かれたものは、1分間に思ったよりたくさんの情報を伝えることができると分かったこと、クラスメートと話す話題が出来て良かった、様々な品物がありクラスメートの別の一面を知ることができ楽しかったなど、全て肯定的だった。

4-2. ポスタープレゼンテーション

10回目の授業で発表を行った。トピックは「学習面や生活面で困っている事柄について」とした。これは国際基督教大学の基礎ゼミの英語版とも言える、Academic Learning Strategiesで2011年度まで行われており、学習上の悩みについて解決法をリサーチし発表する方法である。担当教員による学生アンケートでは、128名中118名がこのプレゼンに対して「良い」との評価を回答している(Kirimura, Iijima, Fukao, and O'Connell 2005, p. 105)。問題を共有することで準備中も発表の際も聞き手との間でコミュニケーションが進み、「大学生活をサポートする」目的の基礎ゼミの授業には相応しいと考えた。また、個人的な事柄に対し、客観的な解決方法を探してもらいたいと希望した。

本研究の活動では、一つのトピックについて1チーム3人でポスターを1枚作成し、4チームが教室の四隅にポスターを貼付し同時に発表する形で行った。8チームを前半と後半の4チームずつに分け、前半の発表時には後半の4チームがそれぞれ発表を聞く役割になり、発表チームと聞き手チームは1対1のまま、1回の発表ごとに聞き手チームが次の発表チームの発表場所へローテーションする、という動きである。同じ内容を4回、別のチームを前に発表するので良い練習になる。5分後と6分後にタイマーで知らせたが、最初のブザー音では、発表(5分)の後の質問や対話をその後1分で止めるよう伝えた。続く6分後のブザーでは、発表を止め、聞き手チームには次のチームに移動するよう伝えた。

以下に学生への説明の手順を示す。

- 1) 筆者の英語の授業でプレゼンテーションに使われたポスターを何枚か見せ、ポスターの具体的なイメージを与えた。
- 2) ノートに「学習面で困っていること」、「生活面で困っていること」と見出しをつけ、各自書き出す。(2分)。
- 3) 左右前後に座っている学生同士で情報交換をする。その後今回のプレゼンテーションの仕方を筆者が説明した。
- 4) 翌週のポスター作成にあたり、各チームに配付する用紙とマーカーを見せ、他に筆者が用意できる文房具を伝えた。
- 5) 学生によるチーム作り。チーム名と学生の名前を板書し、全ての学生がチームに入っていることを確認した。
- 6) 発表のトピックを決める課題とポスター作成時間を翌週の授業時間内に設けることを伝えた。

初回の説明は、ここまでで15分程度を要した。学生同士で話をさせたこと(上記手順の3)がブレインストーミングになっていた様子で、チーム決定は非常にスムーズだった。

翌週の授業では文房具の配付後、各チームに分かれて作業を行いつつ、1) チーム名、2) 代表学生名、3) トピック、を板書させ、前半・後半のチームに分けた。トピックを全員が知ることで翌週の授業がイメージしやすくなるのではないかと考えた。発表の仕方（「発表5分→タイマーブザー音→1分→ブザー音→聞き手グループの移動」を4回行うこと）、各チームの場所、評価基準の確認を学生と行い、筆者はチームを回りポスターで進捗状況を確認しながら、自由に練習をさせた。また、同じ発表グループ（前半・後半）の発表を見ることができないので、5分の発表を3人で分けるのではなく、1人でも発表を行えるように準備しておけば、その間に他の発表を聞きに行っても良いので5分通しての準備をしておくように伝えた。学生のトピックは以下の通りだった。

表1: ポスタープレゼンテーションの各チームのトピック

発表1回目（前半）	発表2回目（後半）
1. 視力（を低下させない方法）	1. 電車の中の過ごし方
2. 英語を楽しく学習	2. ノートの取り方
3. 第二外国語の難しさ	3. 睡眠（より良い睡眠のために）
4. 時間の使い方	4. 要約の書き方

トピックだけでなく、殆どのチームが内容についてもおおよそ決めて来ていた。また、用紙の大きさを確認できていたので、模造紙に貼る画像や文字などを印刷して既に用意して来ていたチームもあり、情報の順番や表現の仕方などを話し合っていて決まっていた。ポスターを作り終えなかったチームが1チームあったが、別の日のお昼休みを使用して作成したとのことだった。

発表当日は、発表の順番と場所を再確認し、すぐに発表を始めた。各チーム4回の発表を行ったが、回が進むにつれて内容も無駄がなくなり、時間配分にも改善が見られた。聞く側からも質問が多く出て、余り接することが少ないクラスメートとも話げできたことと、自分の悩みを共有でき解放されたのか、非常に楽しそうに全員が参加していたのが印象的だった。以下が学生のポスターの例である。

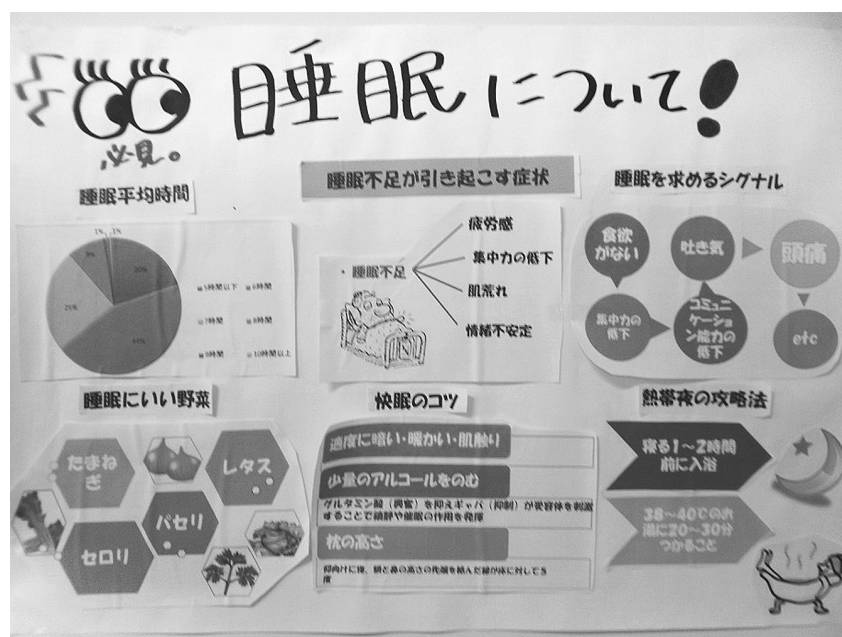


写真1: 学生のポスター例

イメージをつかみやすくするために学生の発表の様子を以下に示す。



写真 2: ポスタープレゼンの様子

発表後、フィードバックのためのプリントを配付した。評価ポイントは、1) 自分のプレゼンについて（話し方、内容、ポスター）、2) 他チームのプレゼンについて（ベスト2を選んでもらい理由を説明する）、3) 活動全体、の3点である。学生は水を打ったように静かになり熱心に記入していた。コメントの主なものは以下の通りである。

評価（プラス）

- 1) 話すことは少ないと思ったが、質問をされて不足部分がわかった。自分の発表の課題がわかった。
- 2) 発表の内容とポスターのどこに何が書いてあるか全て理解していないとうまく発表できない、と理解できた。
- 3) グループ作業がためになり、楽しかった。
- 4) 興味のあるトピックだったので楽しく、理解も深まった。
- 5) 他の人の発表が参考になった。
- 6) どのチームも資料が見やすく、動機・結論がまとまっていた。
- 7) ポスターへの指差しなど、ジェスチャーをしながら説明があるとわかり易いと感じた。

評価（マイナス）

- 1) 他の発表をもっと見たかった。
- 2) ポスター作成の時間がもっとあれば良かった。
- 3) 1回に4チームは多い気がする。

学生がベスト2に選んだチームの評価は、翌週にチームに渡した。幸いなことに、全てのチームが選ばれていた。1度に発表するチーム（ポスター）の数は、教室の大きさと時間の長さに応じて変えられるが、今回は教室が狭かったため、隣同士の発表がうるさく聞こえた時があったようだ。

4-3. PowerPoint を使用してのペアでのプレゼン

課題図書（『ことばと文化』鈴木孝夫著）の中で疑問に思う点や更に調べたい点を挙げ、Research Question → 調査 → 考察 → 結果の形で14回目、15回目の授業時間に発表を行った。学生は「コンピューター・スキルズ」という必修授業で5月から6月にかけてOfficeのPowerPointを学習してい

たので、学期末の7月にスライドを使用してのプレゼンを試みた。時間は7分とし、12回目の授業で説明を行い、課題図書の章・節ごとに担当のペアを決めた。調べる項目 (Research Question)、調査方法と予測される内容について書きこむプリントをペアに1枚配付し、翌週までの課題とした。

翌週は発表準備時間を十分授業内に設けた。プリントで発表内容を確認しつつ、ペアを回って助言を与えた。また、前述の“Presentation Zen (2008)”を用い、効果的なスライドについて以下の説明を与えた。1) 文字は大きく少なめが分かりやすい、2) 画像を多く用いる、3) 画像の大きさや人物の視線によるスライドの良いバランス (人物がスライドの外を見るか、中を向いているかで印象が変わること) に注意することや、アニメーション (文字などの回転など) は止めて、色使いもシンプルにするよう伝えた。聞き手が「見て」分かるようなスライドを作成するよう指導した。発表は翌週と翌々週の2回に分け、学生同士の評価 (良かった点と改善した方がよい点: スライド、話し方、内容について) シートを配付し、最後にプレゼン全体の評価を行った。

発表は比較的大きな声で分かりやすいスライドを用い行われ、クラスに呼びかけを行ったり、クイズ形式にしたりとどのペアにも工夫が見られ、1年前期の発表としては努力の結果が見えるものばかりだった。が、話す際にはポスタープレゼン時よりアイコンタクト不足で、映写されたスライドやメモを見る学生が多かった。学生のコメントからは、1枚のスライドを作るのもまだ時間がかかる、試験期間に入り練習に余り時間をかけられなかった、ポスタープレゼンでは少人数のためアイコンタクトがしっかりできたが、クラス全員の前でのプレゼンはまだ慣れない、というコメントが目立った。

学期末の学生の感想は、3分の1はプレゼンに慣れてきたと感じ、全員の学生がスライドと発表内容の工夫に時間をかけた、と書いていた。また殆どの学生がスライドを使用しての発表の機会を肯定的にとらえ、情報の発信者としても受け手としても「プレゼン」という活動を楽しんだ、とのことだった。緊張しアイコンタクトがうまく取れなかったという反省や他のペアの発表は楽しく良くできていたが、自分の発表はまだ練習が必要だという内省的なコメントも幾つか見られた。

4-4. PK 10×10 を使用しての個人でのプレゼン

夏休みの課題を利用し、PK の変わり版である 10×10 (10 秒ごとに自動で移るスライドを 10 枚使用するもの。下部の丸い点がタイマーの役割をし、1 秒ごとに消えていく) を全員使用し、個人発表を行った。10×10、つまり 1 人 100 秒余りで終わるので PK に対する不安を解消し、後期始めの良い導入プレゼンとなると考えた。

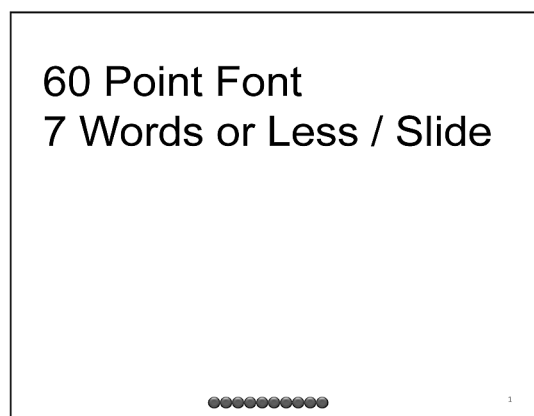


図 2: 10×10 のスライドテンプレート (2 枚目から 11 枚目まで使用する)。

授業ではスライドの増やし方、PKを使用したプレゼンの様子の録画ビデオを見せ、またスライドに何を入れるかのプランニングシート（表紙となる1枚目から終了までの計12枚のスライドの内容と主なコメントを書き入れるシート、Christianson & Payne 2011, p.13を承認の上で部分的に使用）を配付して、準備させた。プレゼン時間は1分40秒余りで終えるので、できるだけメモを見ずに話すよう、励ました。また、1枚目の「動かないスライド」を写している間に、作品を選んだ理由とプレゼンのイントロダクションを「マジックナンバー3」を使用しできるだけ三つにまとめ、伝えるよう助言した。課題はシェークスピア作品の中から一つを選択し要約と感想を書く、というものだったが、物語のあらすじと作品の読書をクラスに薦める、という内容で発表した。発表者は、発表当日に聞き手を変えて練習を2回行い、聞き手は助言を与える、というリハーサルを行った。

当初は、面倒がっていたり不安そうな様子だったが、始めてみるとスライドが移っていく様子をゲーム感覚でとらえ、また他の学生の発表と違いを出すべく工夫が見られ、楽しい発表会となった。例えば、登場人物を漫画の家族構成で説明したり、映画を作るとしたらと仮定し、人気タレントなどを配役し登場人物を説明する、などである。アイコンタクトやジェスチャーが苦手な学生も、100秒を「短い」ととらえたからか努力が見られ、スライドも10秒で伝えられる内容を整理し要領よくまとまっていたものが多かった。

学生の反応は、1名を除いてプレゼンに慣れてきたと感じ、「楽しかった」、「10×10は短いのでまたしてみたい」、「10×10と20×20を足して半分にしたものをしてみたい」、「20×20に挑戦してみたい」などの積極的なコメントが多かった。また他の学生からの評価を肯定的にとらえ、更に喜びを感じているコメントが多かった。例えば、「自分が工夫したところを褒められたので嬉しかった」、「話がまとまっていてわかりやすかった」とあり、安心した、「自分が思っていたより高い評価があり驚いた」、などである。直前のリハーサルが緊張を和らげ、効果があったとするコメントも複数見られた。

4-5. PK 20×10 を使用して個人でのプレゼン

上述4-3と同様に課題図書の中で疑問に思う点や更に調べたい点を挙げ、Research Question → 調査 → 考察 → 結果の形を1人200秒、つまり3分20秒で行った。20×20では前回の10×10から4倍の長さになり急な増加と思われたので、1枚を20秒で話す技術に挑戦するため20×10に話し合いで決めた。前回と同様に全員が同時にリハーサルを2回行ってから、発表に移った。プレゼンに大分慣れてきた様子が窺え、メモを何も見ずに行う学生や、20秒の間に聞き手に質問を投げかけたり、教室の真ん中でジェスチャーを加えて行う学生などがおり、練習の成果が現れていた。

学生のアンケートは、学年末に重なったので1年間の振り返りアンケートの中で行った。結果を以下に述べる。

4-6. 振り返りアンケート

上述した(3-2-3)様にプレゼン方略の項目についてアンケートを行い、学生の意識を調べた。当日出席の16名のうち13名から提出があった。結果は表2の通りで数字は伸びを示す。例えば、4月の自分はアイコンタクトは-1、現在の自分は0と感じているならば「伸びは1」ということである。

表 2: プレゼンの振り返りアンケート結果

学生	Q1 アイコン タクト	Q2 声	Q3 姿勢	Q4 ジェス チャー	Q5 表情	Q6 落ち 着き	Q7 視覚 資料	Q8 テーマ 選び	Q9 構成	Q10 評価す る力	平均
1	3	0	0	1	1	2	1	1	0	1	1.0
2	1	2	1	0	0	1	1	1	1	1	0.9
3	3	3	3	3	1	2	3	2	2	2	2.4
4	1	1	0	2	0	0	1	0	1	0	0.6
5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2
6	1	0	2	0	0	2	1	0	0	0	0.6
7	3	3	0	3	1	1	0	0	1	1	1.3
8	0	0	1	0	1	0	0	0	1	1	0.4
9	1	2	1	2	1	9	1	0	0	1	1.8
10	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	2.4
11	1	2	1	1	1	2	2	2	2	2	1.6
12	3	2	1	2	1	3	1	1	1	1	1.6
13	0	-1	1	0	0	1	0	0	1	1	0.3
平均	1.46	1.31	1.00	1.23	0.69	1.92	1.08	0.77	1.00	1.15	

平均からは、プレゼンに落ち着いて臨める（Q6）ようになったことが一番の伸びを示し（1.92）、アイコンタクト（1.46）や声の調子・声の出し方（1.31）、ジェスチャー・ボディランゲージ（1.23）にも伸びを感じているが、スマイルをしながら話すこと（Q5）には最も伸びを感じていない（0.69）、という結果となった。

自由表記では、スキルが向上した理由として、発表を重ね改善する機会につながったことを述べた学生が3名いた。また、PKを使用した中での練習を挙げた学生もいた。スライドが進むので話し続けることに抵抗がなくなった、とのことだ。良かった点として、個人発表と協同発表の両方を経験できたこと、学生からの評価シートにより、自分の悪い点や良い点がよく理解できた、などの回答があり、評価シートを挙げた学生が4名いた。また、リハーサルを発表前に行ったことが自信と落ち着いた態度につながったと述べた学生もいた。

では、伸びの違いに学生共通の理由が見られるだろうか。平均すると2.4の伸びを回答した2名（3番と10番）と、0.2~0.4の伸びとした学生（5番、13番、8番）のコメントを比較してみたい。

3番の学生は、視覚資料を客観的な立場から見やすいものにしようとしたので、スライドの作成が最も上達したとコメントしている。また、10番の学生は評価シートにより他人からどのように見られているか具体的に感じたことが向上の理由としており、両者とも客観的に分析することが伸びにつながったようだ。また2名とも4月時点の全ての項目を-1か-2に自己評価しているため、「できなかった自分」からの自己高揚感を感じることができる。

伸びが低かった学生たちは、4月時点も現在も評価が低い（5番）か、4月時点で0か+1（少しできる）の評価をしている（8番と13番）ので、伸びが少なかった。共通点は現状把握の混乱と思われる。5番は他の学生との比較から自信がなく否定的なコメントが目立つ。一方8番は「余り上達が見られなかったものとその理由」に「発表内容をうまくまとめられたら上達する」としながら+1の伸びを「話の構成」スケールに記し、13番は「PC操作が苦手で情報収集が最も上達しなかった」としながらも4月時点と現在の自分の情報収集を+1と記している。自分のプレゼンスキルに対して客観

的に認識し、向上させようとする前向きの姿勢が感じられないことが共通していると言えるのではないか。

5. 考察とまとめ

秋田（2009）は小・中学生の学力形成のための授業と学生の学習参加方略について多岐にわたるアンケート調査を行ったが、学生が、「自分の言葉で言い換えてみる、（略）聞いたことを自分なりに整理して考えを書いてみる等、理解に向けての精緻な方略行動を引き出す活動を、教師が授業中に保障し、それらの方略を自らいろいろな場面で使用できるように指導していくことが必要（p. 225）」とまとめている。更に、学生が理解過程を振り返るためには「学習過程での自らの思考を対象化して捉えられるようにする手立てとして（略）、思考を表現し可視化する道具立てとそれを使う時間の保証が授業中に求められるだろう。（p. 225）」としている。つまり調べ学習とプレゼンという組み合わせと協同学習は学生の学びのためには最適と考えられる。

当該授業実践では個人、ペア、3人チームで発表する機会があったが、準備に授業時間を使うことで学生は協同学習を楽しみつつ、発表の内容を向上させる機会を持てた。また、発表直前の授業内でのリハーサルも、本発表に良い効果があった。筆者が学生の頃は、グループ学習や準備は空き時間に行うもので、授業時間を使うことは怠惰の表れのような感があったが、昨今の学生事情では、学生の授業の履修が複雑になり、同じ学科の学生同士でも「顔を合わせない」ということもしばしばである。近隣県から2時間近くかけて通学する学生も少なくない。段階的に授業時間内で協同作業や準備の導入を教員がすることで、スキルの向上とクラスの調和につながることを確認できた。

ピアサポートとしての学生同士のフィードバックも、客観的な見方を育て両者にプレゼンスキル向上の効果があると確認できた。またクラス内の信頼関係作りにも作用すると考えられる。

振り返ると、二つ目のポスタープレゼンからクラスの調和に弾みがついた。仲の良いグループだけでなく、他の全てのクラスメートとコミュニケーションを取り自己表現をすることが1年生の6月という時期に、爽快さと高揚感をもたらしたようだ。いつも眠そうな顔をしていた学生が生き生きと話す表情に、コミュニケーションの持つ力を再認識した。その翌週行われた学寮研修では、欠席も体調不良になる学生も出なかったのは、この活動の影響があると考えている。

ポスタープレゼンは、志村（2010）も「最近では学会によってはポスター・セッションが主流になりつつある。（略）特にアメリカではポスター・セッションが非常に盛んである。（p. 156）」とその著書『理科系のための英語プレゼンテーションの技術』の中で利点を多く述べており、学生が将来の研究や営業で使用する可能性を示唆している。上述したように、発表だけでなく準備段階から情報を可視化しながら目の前で行う協同作業は具体性と即効性があり、特に1年生にはグループでの発表を取り入れていきたいと考える。

また、丁寧な指導の必要性を改めて感じている。ポスターの用紙を教員が提供することで、学生は情報整理がし易くなり、協同作業もスムーズだった。PKもサンプルとして教員のプレゼンと他の学生のビデオの導入があり、学生はプランニングシートで情報の整理や構成を考え易くなったと観察している。

今回の実践には、前期が23名、後期が18名と当該クラスが少人数での発表だったことも大きく影響している。30名以上のクラスの実践の際は新たなアプローチが求められるだろう。一方で、研究

結果の一般化という視点からは、今回対象とした13名という数は小さすぎるという批判もあるだろう。今後の課題として研究を続けていきたい。冒頭で述べたように大学内でも共通したスキルの学修を目的としているが、その効果は余り検討されていない。これを機会に学科間、教員間の協同研究が進むことを希望し、ご意見・批評をお待ちする。

謝 辞

この研究を進めるにあたり、国際基督教大学リベラルアーツ英語プログラム（ELA）（2013年3月時点）のMark Christianson先生、Silvan Payne先生からタイマー付きのPK10×10とPK20×20のテンプレートを快くお譲りいただいた。両先生には心よりお礼申し上げる。また両先生からは、授業などでこのテンプレートを是非活用して欲しい、それは喜びである、とのお言葉も頂戴している。ご入用の方は杉橋までご連絡いただければ、ご協力差し上げたい。

参考文献

- 秋田喜代美（2009）「質の時代における学力形成」『基礎学力を問う 21世紀日本の教育への展望』東京大学学校教育高度化センター編 193-233
- Bayne, K. (2005). Individual and Concurrent Poster Sessions as a Presentation Alternative in EAP/EFL Classrooms. *ICU Language Research Bulletin*, 19, 1-17.
- Christianson, M. & Payne, S. (2011). Helping Students Develop Skills for Better Presentations: Using the 20×20 Format for Presentation Training. *ICU Language Research Bulletin*, 26, 1-15. (<http://web.icu.ac.jp/lrb/2011/12/02/docs/Christianson%20LRB%20V26.pdf>)
- Kirimura, M., Iijima, Y., Fukao, A., & O'Connell, G. (2005). Curricular Revision of Academic Learning Strategies: Process and Outcome. *ICU Language Research Bulletin*, 19, 95-111.
- LeBeau, C. & Harrington, D. (2001). *Getting Ready for Speech*. Eugene, OR: Language Solutions Inc.
- 松香フォニックス研究所（2011）『やさしい英語で自己紹介 This is Me!』東京: mpi
- 守末恵（2010）「パブリックスピーチ演習クラスにおける学びの差—クラスメートから学ぶ力を育てる—」『初年次教育学会誌』3(1), 59-66
- Payne, S. (2012). Empowering Student Presentations with PechaKucha, Gunma JALT プレゼンテーションのためのリハーサル（2012年9月23日）
- PechaKucha 20×20. The Art of Concise Presentations. Frequently Asked Questions (<http://www.pechakucha.org/>)（2013年2月11日閲覧）
- Reynolds, G. (2008). *Presentation zen: simple ideas on presentation design and delivery*. Berkeley, CA: New Riders Publishing.
- 佐藤綾子（1996）『教師のパフォーマンス学入門 もっと本気で自分を表現しよう！』東京: 金子書房
- 志村史夫（2010）『理科系のための英語プレゼンテーションの技術 改訂新版』東京: ジャパンタイムズ
- 鈴木宏昭（編）（2009）『学びあいが生みだす書く力—大学におけるレポートライティング教育の試み』東京: 丸善プラネット
- Tanner, P. & Chapman, J. (2012). Poster presentations speak for themselves. *The Language Teacher*, 36(3), 15-20.
- 安永悟（2006）『実践・LTD話し合い学習法』京都: ナカニシヤ出版

（すぎはし ともこ 英語コミュニケーション学科）